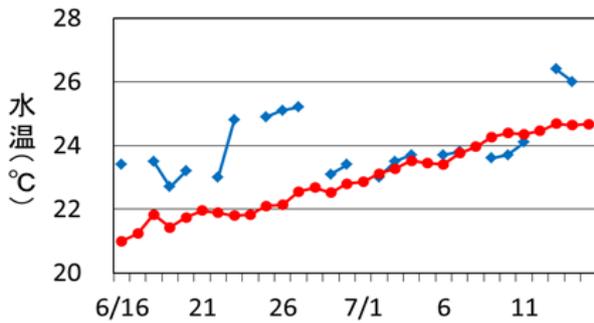




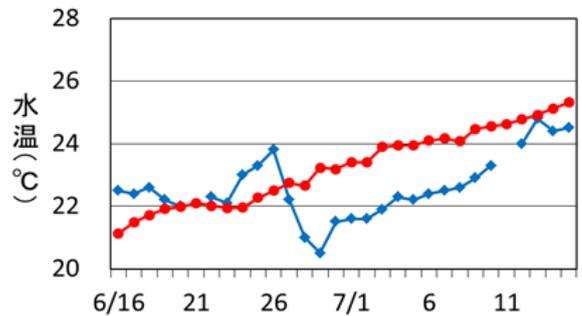
【海の状況 (6/16~7/15)】

- ・ 神子地先の表面水温… 平年水温の $-0.7 \sim +3.0^{\circ}\text{C}$ の範囲で推移していた (図1)。
- ・ 米ノ地先の表面水温… 平年水温の $-2.7 \sim +1.4^{\circ}\text{C}$ の範囲で推移していた (図2)。



◆ 神子(本年) ● 神子平年(過去 30 年平均)

図 1. 若狭町神子地先における表面水温の推移



◆ 米ノ(本年) ● 米ノ平年(過去 15 年平均)

図 2. 越前町米ノ地先における表面水温の推移

- ・ 2015年7月上旬の若狭湾および沿岸域の水深0m水温は、昨年より低く $20 \sim 22^{\circ}\text{C}$ の水温分布が広がっていたが、100m深水温は昨年同時期と同様、 $14 \sim 15^{\circ}\text{C}$ 台の水温分布となっていた (図3)。

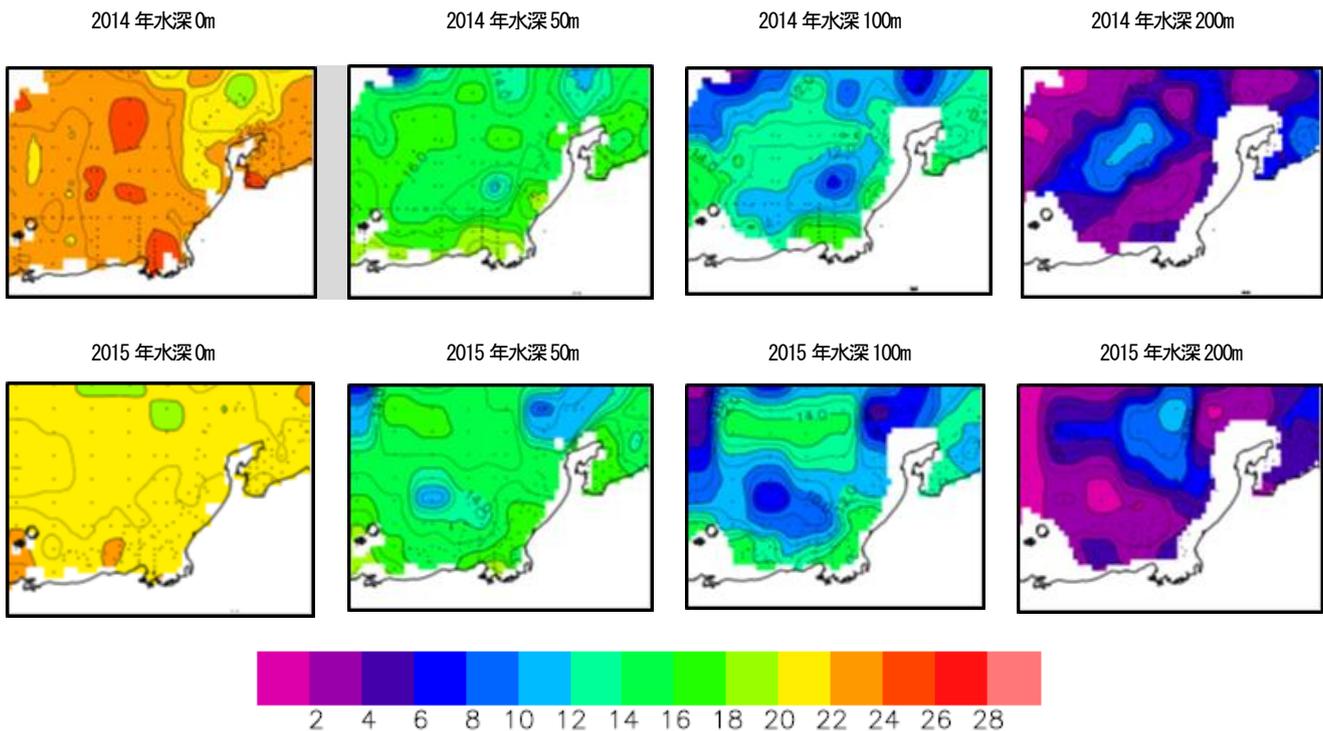


図 3. 福井県およびその周辺海域の水温分布図 (日本海区水産研究所ホームページ発表の日本海漁場海況速報より)

平成27年度 第2回 日本海海況予報

日本海区水産研究所からみだしの予報が発表されましたので、その概要をご紹介します。

○予報対象期間：平成27年7～9月

○対馬暖流域の表面水温は、やや高め（1℃程度高め）で経過する。

○対馬暖流域の50m深水温は、日本海西部では平年並み（±0.5℃程度）、北部ではやや高めで経過する。

※詳しくは（独）水産総合研究センターのホームページ（<http://www.fra.affrc.go.jp/>）からも閲覧することができます。

（下中邦俊）

〔県内の漁模様：6月〕

2015年6月の県内の総漁獲量は1,330tで、昨年同月を152t上回った。

定置網

漁獲量は973tで、アジ類、サワラ、サバ類、スルメイカ等を中心に前年同月を24t上回った。一方、ブリ類、カタクチイワシ、マダイ等の魚種を中心に前年同月を下回った。

底びき網

漁獲量は70tで、アカエビ、ハタハタ、その他カレイ等の魚種を中心に前年同月を16t上回った。一方、キダイ、その他エビ等は前年同月を下回った。

釣り・その他

漁獲量は288tで、スルメイカ、タコ類等の魚種を中心に前年同月を113t上回った。

表. 主要魚種の漁法別漁獲量(6月)

定置網 (kg)						底びき網の続き (kg)					
魚種名	2015年	2014年	平年	前年差	平年差	魚種名	2015年	2014年	平年	前年差	平年差
マイワシ	204	0	248	204	-44	メバル類	125	198	78	-73	47
カタクチイワシ	5444	7272	10823	-1828	-5379	ホタルイカ	0	0	0	0	0
アジ類	218921	47415	350492	171506	-131571	タコ類	487	451	764	36	-277
サバ類	40722	2028	60537	38694	-19814	アカエビ	45,221	29,487	39,441	15,733	5,780
マグロ類	3159	4578	5714	-1419	-2556	その他エビ	3,315	3,565	3,721	-250	-406
ブリ類	190753	696002	273516	-505248	-82763	その他	5,312	5,540	3,679	-228	1,634
(ブリ)	53542	20884	56667	32658	-3126	合 計	69,735	54,078	55,362	15,657	14,373
(ウラサ)	4282	20051	16627	-15769	-12345	釣り、延縄、さし網、その他の漁法 (kg)					
(ハマチ)	46157	37623	51843	8535	-5686	魚種名	2015年	2014年	平年	前年差	平年差
(ツバス)	86734	617418	148312	-530684	-61578	ブリ	570	400	298	169	272
サワラ	200021	49863	68349	150157	131671	マダイ	2,048	1,855	3,746	192	-1,698
マダイ	7268	8042	11598	-774	-4330	キダイ	6,289	7,723	6,108	-1,435	180
スズキ	9030	7525	6914	1506	2116	アマダイ	2,874	3,156	5,349	-282	-2,474
ヒラメ	994	1447	1459	-452	-464	スズキ	3,916	3,735	5,801	181	-1,885
フグ類	9278	5055	10246	4223	-968	ヒラメ	1,566	1,863	3,113	-297	-1,548
スルメイカ	30042	1002	11891	29040	18151	その他カレイ	1,785	1,741	3,485	43	-1,701
ヤリイカ	0	0	13	0	-13	アナゴ	3,668	5,094	3,789	-1,426	-121
コウイカ	163	501	295	-338	-132	サヨリ	0	6	143	-6	-143
その他	257368	118658	220003	138711	37366	メバル類	2,019	4,238	5,116	-2,219	-3,097
合 計	973368	949386	1032098	23981	-58731	スルメイカ	149,839	46,469	199,899	103,370	-50,060
底びき網 (kg)						ヤリイカ	30	0	279	30	-250
魚種名	2015年	2014年	平年	前年差	平年差	コウイカ	267	1,366	770	-1,099	-502
マダイ	658	589	954	69	-296	タコ類	33,402	31,029	36,942	2,373	-3,540
キダイ	1949	2417	924	-468	1025	その他	79,613	66,357	99,844	13,256	-20,230
スズキ	0	6	2	-6	-2	合 計	287,884	175,033	374,681	112,851	-86,798
ヒラメ	82	36	46	46	36	全漁法 (kg)					
アカガレイ	10243	10084	3392	160	6851	魚種名	2015年	2014年	平年	前年差	平年差
その他カレイ	1665	1343	1210	322	455	合 計	1,330,986	1,178,497	1,462,141	152,489	-131,155
アナゴ	15	32	34	-17	-19						
ハタハタ	662	330	1119	332	-457						

※1 平年の値は2005-2014年の10年平均です。 ※2 ()は銘柄、その他カレイはアカガレイ以外のカレイ類、その他エビはアカエビ以外のエビ類です。

※3ズワイガニはオス・メス・水ガニに分けて集計しています。 ※4 数値は小数点以下を四捨五入しています。

平成27年度スルメイカ漁場一斉調査結果

日本海側の各試験研究機関によるスルメイカ漁場一斉調査が、6月下旬から7月上旬にかけて行われましたので、その結果についてお知らせします。

(1) 福井県の調査結果

福井県沖合の4定点において、釣機6台を用いて毎晩20時～4時の8時間釣獲試験を行いました。

- 漁場水温・釣獲海域の表面水温は20.5～22.4℃(2014年; 23.1～24.7℃)、50m深水温は13.3～15.6℃(同; 12.6～17.0℃)でした。
- 釣獲結果・総釣獲尾数は、2,077尾(2014年; 1,122尾)、CPUE(釣り機1台1時間あたりの釣獲尾数)は1.9～27.9尾、平均11.8尾でした。
- 体長組成・釣獲されたイカの胴長(外套背長)は、6月30日及び7月2日の操業においては20～21cmの個体が主体で、7月1日及び3日の操業においては18～21cmの個体が主体でした。

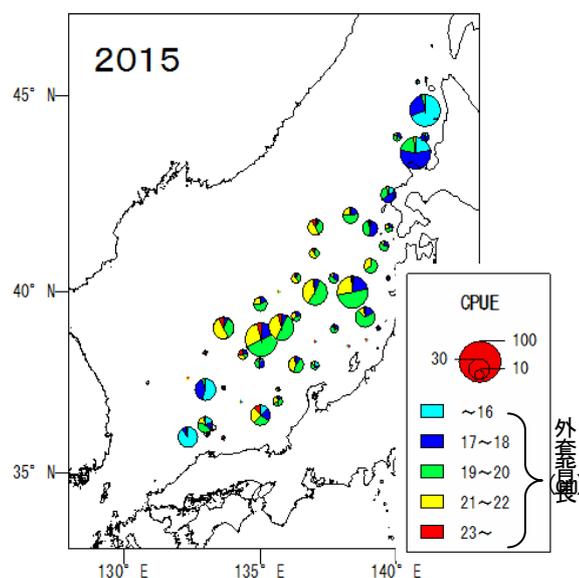
月日	6月30日	7月1日	7月2日	7月3日
調査位置	N 36° 38' E134° 59'	N 38° 02' E135° 00'	N 37° 19' E135° 40'	N 37° 00' E135° 39'
釣獲尾数	1,342	436	92	207
CPUE	27.9	9.0	1.9	8.6
平均胴長 (cm)	19.5	18.6	20.0	19.8
表面水温 (°C)	21.0	20.6	20.5	22.4
50m深水温 (°C)	13.3	15.1	15.6	15.0
標識放流尾数 (尾)	700	20	—	107
標識番号 (黄色アンカー型タグ)	JPN I23～I29	JPN I22		JPN I21～I22

(2) 日本海全体の状況

日本海区水産研究所の取りまとめによると、全調査地点におけるCPUEの平均は14.56尾で、前年(28.80)の約半分、近年平均(18.29)の80%でした。道央～道北海域では、外套背長16cm台及び17～18cmの小型サイズを中心に採集され、CPUE50尾前後の分布密度の高い調査点がありました。日本海沿岸域では、北部では19cm台～20cm台サイズが中心で、西部では16cm台以下の小型サイズが中心に採集されました。CPUE20尾前後の調査地点が複数あったものの、CPUE50尾を超える分布密度の高い調査地点はありませんでした。沖合域では、大和堆付近から秋田県沖にかけて、CPUEが50尾以上の高い調査点がありました。

今後の見通しとして、西部日本海では、来遊量は前年および近年平均を下回っており、今年も近年同様、好漁場は形成されにくいと予想されます。沖合域の漁況も、前年および近年平均を下回ると予想されます。主漁場は近年同様、8月～9月は道北沖、11月～12月は大和堆付近に形成されると予想されます。

本調査では標識放流が行われました。標識の付いたスルメイカが採捕されましたら、水産試験場までお手数ですがご連絡ください。
(嶋田雅弘、北山和也)



ナマコ種苗生産（その2）

栽培漁業センターでは、平成23年から漁業者の要望を受けて始めたナマコ種苗生産も5年目に入りました。当初計画の生産数は、30mmサイズ10万個でしたが、現在では15万個の生産になっています。みなさんご承知のとおり、ナマコは体色の違いによってアカ、アオ、クロの3種類に分けられています。アカナマコ、アオナマコは生食用として馴染みがあり、嗜好品として親しまれています。

当センターでは、アオナマコの生産を行っています。本年度は6月から生産を始め、約1.5ヶ月経過し、ナマコは3~5mmに成長しています。

毎日、懐中電灯を照らしながらナマコを観察し、ワカメ粉末などの餌料を与えています。

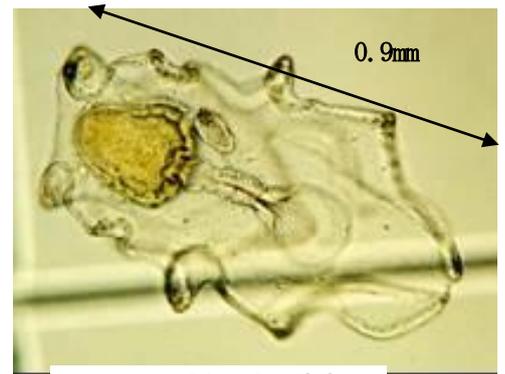
種苗生産は、当初から技術面での課題を解決しながら行ってきましたが、新たに次々と生じる課題にナマコの生産は難しいとつくづく感じており、今回は2つの課題について取り組みました。

1点目は、ナマコは卵からふ化すると2週間程度浮遊生活をします。その間は、アウリクラリア、ドリオラリアと形を変え、さらに本来のナマコに近い形のペンタクチュラと変わり、そして稚ナマコに姿を変えます。これを「変態」といい、本来の着底生活に入ります。稚ナマコを得るために、ドリオラリアになった時、人為的に着底用の波板を水槽内に入れ着底させます。これを採苗といい、ここからが生産の本番で、安定した生産するにはどれだけ多くの稚ナマコになって着底してくれるかが大きな鍵となります。暗所で採苗すると着底率が比較的高いことがわかってきましたので、できるだけ室内を暗くして採苗を行い、その効果を例年と比較しています。

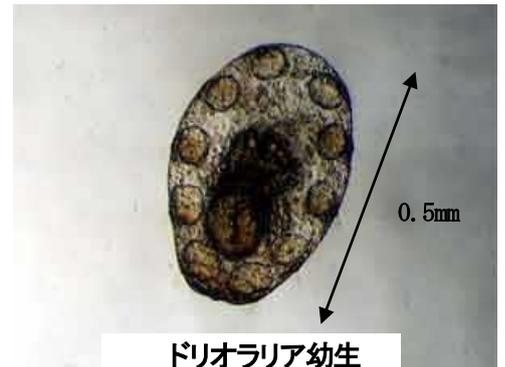
2点目は、成長するにしたがって稚ナマコの大小の差が大きくなってきますので、ドリオラリアを収容する際、収容数量に差をつけその後成長を検討することで、最も適切な収容数を調べています。

安定した種苗生産のためにはまだまだ研究が必要です。今後も課題を解決しながら努力を重ねて参ります。

(栽培漁業センター 川代雅和)



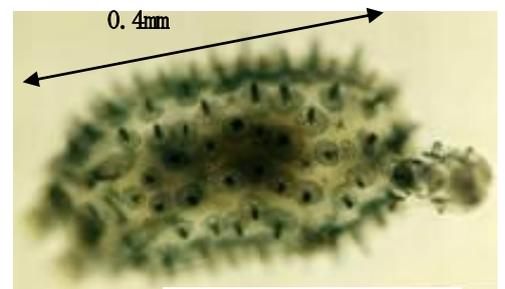
アウリクラリア幼生



ドリオラリア幼生



ペンタクチュラ幼生



着底した稚ナマコ

写真:北海道の漁業
図鑑、他より